

新約聖書 使徒言行録 4章5節—12節（新共同訳）

⁵ 次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。⁶ 大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。⁷ そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。⁸ そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、⁹ 今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、¹⁰ あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。¹¹ この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。¹² ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

新約聖書 ヨハネの手紙 一 3章16節—24節（新共同訳）

¹⁶ イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。¹⁷ 世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。¹⁸ 子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。

¹⁹ これによって、わたしたちは自分が真理に属していることを知り、神の御前で安心できます、²⁰ 心に責められることがあろうとも。神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じだからです。²¹ 愛する者たち、わたしたちは心に責められることがなければ、神の御前で確信を持つことができ、²² 神に願うことは何でもかなえられます。わたしたちが神の掟を守り、御心に適うことを行っているからです。²³ その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです。²⁴ 神の掟を守る人は、神の内にもとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。神がわたしたちの内にとどまってくださることは、神が与えてくださった“霊”によって分かります。

新約聖書 ヨハネによる福音書 10章11節—18節（新共同訳）

¹¹ わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。¹² 羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——¹³ 彼

は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。¹⁴わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。¹⁶わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。¹⁷わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。¹⁸だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

説教「良い羊飼い」

教会讃美歌 171 番「かがやく 日を仰ぐとき」 1,2,4 節、
181 番「ここにいます」、 1,2,3 節、
238 番「いのちのかて」 1,2 節、
198 番「主よめぐみもて」 1,2,6 節

本日の福音書は「わたしは良い羊飼いである」という有名な言葉から始まります。

新約聖書における羊飼いのイメージは、その多くが旧約聖書に由来しています。羊飼いのたとえば、旧約聖書と新約聖書にしばしば出てくる重要な表現です。当時の人々にとって、羊飼いのたとえば話は、馴染みのあるものだったのでしょう。

しかし、ここでイエスが、単なる「羊飼い」ではなく「わたしは良い羊飼いである」と語り出したことには、今までにないイエス独自の新しく深い意味が込められていました。「良い羊飼い」とは何でしょうか。

イエスは、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言いました。羊の命を守るために自分の命を捨てることによって、羊飼いと羊の関係の深さが証明されます。良い羊飼いと雇い人の違いが、ここで明らかになります。雇い人とは、雇われて羊の番をしている人のことです。その違いは、普段はなかなか分からないので、いざという時に、たとえば狼が襲って来た危機に、あらわになります。

雇い人は、羊が自分のものではないので、羊の番をするのはただ仕事として、義務としてやるだけです。だから、自分が危なくなった時は、羊に対して最後まで責任を負おうとはしないで、羊を捨てて逃げてしまうでしょう。

しかし、まことの羊飼いは、自分の羊を守るために、その場にとどまって狼と戦い、羊のために自分の命を捨てるのです。

「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」。ここでの「知る」（ギリシア語のギノースコー）とは、相互に呼応する深い関係を表わす言葉です。ただ知識として知るということではなく、深く内面的に知ることです。良い羊飼いは、牧する羊との間に、互いに深く知り合う関係、愛と信頼の関係を造り出します。

「神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに」（ガテラヤ 4:9）と言われているように、知ることは知られることです。羊飼いイエスを知ることによって、羊はイエスに知られるのです。知ることは、知る者と知られる者との互いの深い交わりを通して、愛することへと進むのです。そして、羊飼いと羊の互いに深く知り合う関係性の根底にあるものは、イエスと父なる神との深い交わりです。

本日の福音書から、イエスの死と復活について、より深い認識が与えられます。イエスを表わす「良い羊飼い」は、羊を愛して羊のために命を捨てるのですが、それは羊が豊かに命を受けるためです。キリストの死は、キリストを信じる者が「豊かに命を受ける」ためのものです。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」とあります。この「囲い」とは、比喩的に「ユダヤ民族」を指すと考えられます。つまり、イエスの導きの対象である羊は、民族的な囲いの中にだけいるのではなく、その外にいる諸民族の中にも生きていたのだ、ということを示唆しています。

「わたしは命を、再び受けるために、捨てる」とあります。「命を再び受ける」とは、イエスが十字架で死んだ後に復活したことを指します。「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる」とは、大祭司や群衆がイエスから一方的に命を奪い取るのではなく、命を捨てるのはイエスご自身の意志であり、イエスご自身の力によるということです。

「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である」。本日の福音書の締めくくりとなるイエスのこの言葉は、イエスが命を捨て、それを再び受けるのは、神から命じられてなされることであり、栄光は父なる神にあるということです。「掟」と訳されていますが、「定め」とした方が分かりやすいでしょう。「羊のために命を捨てる」のは、父が定め、命じられたこと

ですが、それはイエスご自身の意志でもあると強調されています。

「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。これから思い起こされるのは、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」というイエスの言葉です（ヨハネ 15:13）。

この言葉は、私が福音書の中で、最も力を与えられる印象的な言葉のひとつです。

さて、キリスト教とは何でしょうか。

今回、私は、それについて改めて考えてみました。

キリストの福音には、イエスの熱い血潮が通っているのです。

そして、キリストの福音は「キリスト教」という一つの宗教の枠にとどまりません。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」とは、イエスの熱い血潮が通うキリストの福音は、宗教の枠を越えて、万人に響き呼応して、救いと希望と慰めをもたらすということではないでしょうか。

羊飼いやイエスと、牧場の羊である私たちが共にいる光景を想像してみてください。

そこでは、羊飼いやであるイエスは、羊のあなたとしっかり結びつき、羊のあなたは、羊飼いやのイエスとしっかり結びついています。

羊には、羊飼いやに自分のすべてを委ねきる喜びがあります。

羊飼いやには、羊を愛し尽くす喜びがあります。

キリストとあなたは、心と心が交流し、血の通ったホットな関係なのです。

あなたが孤独や苦しみの中にいる時、それを思い出してください。

羊飼いやに守られ導かれる羊のように、あなたはいつも神と聖霊によって守られ、導かれている存在であることを、いつも覚えていてください。